

って、階段昇りの交換性はたがえる。

▶観察Ⅱ「方法」階段昇りをはじめから成人と同形式の階段昇降動作ができるようになる時期までの幼児41名(生後46週から227週まで)を対象に、池内わらべ保育園外部階段(蹴上16.4cm、踏面27cm、内法巾107cm、直行17段)において階段昇降動作を8ミリカメラにより観察・記録した。

「結果と考察」観察Ⅰで行なった分析をもとに、乳幼児の階段昇降動作獲得過程をカテゴリーの推移過程として捉え、成人の昇降動作にみられるカテゴリー(立位で両足を交互に出す)に移行するまでを概括的に観察し(図-5)のように整理した。

観察Ⅰ・Ⅱで明らかになった乳幼児の階段昇降動作獲得過程の中で、手・足の役割の特徴的な変化に注目し、ここに大きく3つの水準を設定することができる。乳幼児にとって階段の果す役割はその乳幼児の現に在る水準に照らして次のような区分として捉えることができる。

□水準1)乳幼児は、カテゴリーⅠによる階段昇りをはじめが、降りることはまだできない。この時期において階段は、空間的な障害物となり、観察期間中においても、この水準にある幼児の転落を記録している。

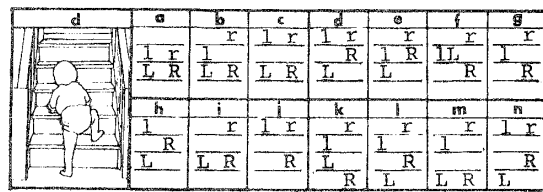
□水準2)交換性の高次化が進む中で、乳幼児にとって階段の昇降は、それ自体が主目的化している。段差空間の使いこなしが進む中期的な時期であるとみることが出来る。

□水準3)乳幼児にとって階段は、次第に遊びの要素のひとつとなっていくとともに、移動のための単なる手段として捉えられるようになる。

▶結論 乳幼児の階段昇降動作獲得過程は(図-5)に示すように3つの水準をもつカテゴリーの推移過程として理解することができる。階段の役割は各水準において異なり、それぞれの水準における乳幼児の最近接領域を構成するための手がかりが得られた。「子どもの生活環境に、子どもにとって魅力あり、レガシなあかつ困難である課題があれば、子どもにとって最近接領域からの外的刺激を豊富につくることが、発達の源泉を組織することである(註3)」と考えるならば、「床面段差」は保育空間の構成上積極的な要素になり得る。本研究は、「床面段差」のもつ空間機能を、乳幼児の発達段階に沿って捉えるための基礎的資料として位置づけることができる。

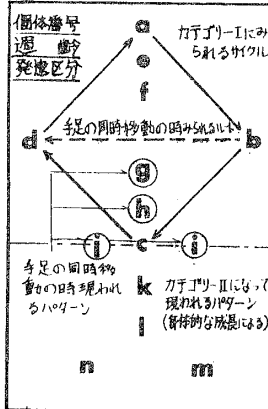
註3. 金田利子「新しい発達観と教育」明治図書1978、26頁。

〈図-3〉踏面上の手足の配置パターン

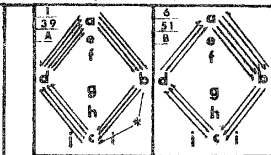


註: 大文字は足、小文字は手。Rは右、Lは左を示す。例: R手。

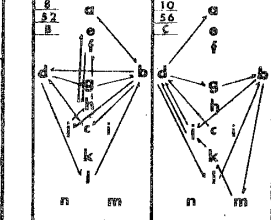
〈図-4.1〉動作連鎖図



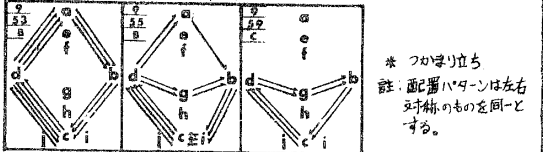
〈図-4.2〉カテゴリーⅠ



〈図-4.3〉カテゴリーⅡ



〈図-4.4〉カテゴリーⅢの推移



〈図-5〉階段昇降動作獲得過程

週令	階段昇降動作	観察例	発達水準
	U P DOWN	(週令)	
50	カテゴリーⅠ	(46)	水準1
60		(59) (67)	
70	カテゴリーⅡ	(63)	
80		(65) (71) (74) (80)	水準2
90		(77) (64) (76) (84)	
100		(92)(97) (93)(100)	
110		(91)	
150		(111) (112)	水準3
200		(113)(117) (123)(128) (137)(140) (146)(162) (169) (171)(150) (186)(200) (165)(175) (178)(179) (180) (189) (191)	